

ある報道番組で見たクルド人の少年の姿。彼が暮らすのは、難民キャンプのテント。そして、彼が身につけていた半袖のシャツは、日本からの救援物資の古着。あろうことが、その半袖シャツは、小学生用の体操着で、胸には、名前と学年学級、学校名が記されたタグが縫い付けられたままでした。(略) ……私は、このほんの少し前に、フリース素材の上着を処分したばかり。クルド少年の体操着より、何倍も状態も質も良く、とても暖かな衣服…(略)。
モノは、今、この時に、必要とされるころへ——『新・片づけ術 断捨離』あとがきより抜粋

もしやアリガタ迷惑？
問題頻発、寄付の現場。

「ランドセル大量に余る。全国から続々、行き場失う」「送る前に連絡を」「東北自治体」(2011年4月23日配信・時事通信)

約2000個のランドセルが行き場を失い、被災地が困り果てているという報道があった。ある町では、着古したセーターやズボン、黄ばんだ下着や油まみれのつなぎといった、状態の悪い救援物資の引き取り手がなく、7・7トンを廃棄したそうだ。

一方、以下は都内のある社会福祉協議会の職員のコメント。「連絡無しで送っていただいても需要と合うとは限らず、その場合は保管場所も無いので、残念ながら廃棄することが多いです」

モノの寄付にまつわる問題は非常時に限ったことではなさそうだが、寄付とは思いのほか、難易度の高い行動なのだろうか。

届けたいのはモノ？
それとも…

想像してほしい。相手が知人なら、連絡も入れずに一方的にモノを送りつけるなんてしないはず。タイミングよく必要としているとは限らないからだ。見ず知らずの他人相手だって同じことだった。

寄付は決して難しくない。自分の不用品を欲しがる相手にたまたま出会える確率が、思っているより低いだけのことだ。一方で、心が震えるような、あるいは人生を変えようとする、人との出会いがあることも事実。モノの寄付にコツがあるとしたら、善意の焦点

を、モノではなく、人に合わせることでいい。

「私たちが被災した方々に届けたのは『希望』です」

これは、やましたさんの『新・生き方術 俯瞰力』中の言葉。寄付を否定している言葉ではない。

希望、それがモノの場合もあるし、モノでない場合もあるだろう。希望の正体とは何かを考え続けることに、大きな意義がある。

断捨離流

寄付の心得

- 一、寄付する相手のことを想像する
- 二、送る前に寄付先に問い合わせる
- 三、新品、または新品同様の美品を
- 四、服の場合、男女が着られるモノを
- 五、当然、費用を負担する場合もある

現場に行って、
衣料支援してみました！



3月某日、ラゾーナ川崎の衣料収集イベントで、人生初の寄付を体験。受付に渡して終了。簡単で思わず拍子抜けしたが、集まった衣類の状態のよさに驚いた。紙袋いっぱいを持ち込む常連の姿も。みんな意識が高い！『日本救援衣料センター』を通し、全世界へ届けられる。●【エコハロー！衣料支援プロジェクト】。http://www.mit-suifudosan.co.jp/ecohello/

◀見慣れた広場が特設会場に早変わり。この日は572名が参加し、2033kgの衣料が集まったという。



● ボランティアプラットフォーム
http://b.volunteer-platform.org/



C O L U M N

4

東日本大震災の被災者と支援者をダイレクトに結ぶ
マッチングサイト情報。

支

「援助物資マッチングサイトはもうご存じ？」
必要！、「新品の○○をお譲りできます！」と、双方から書き込むことで、需要と供給がサイト上で直接繋がるという優れたシステム。仕分けの人手、保管のスペースなどに、必要としている相手に必要なだけ送ることが可能。
震災後、ITを活用したボランティア専門団体が真っ先に立ち上げた(上記)。その後も同様のサイトが続々と立ち上がった。しかし、サイト数が増えれば増えただけアクセスや物資が分散する→深層なデメリットも。特にPC環境が整っていない被災地側の使い勝手を考えると、増え過ぎることのデメリットがますます懸念される。とはいえ優秀なシステムであることは絶対。一度、被災者側からの書き込みをチェックしてみることをおすすめする。